

Exhibition Overview & Highlights.



●「大入道」(彦根市 江國寺)

大村新弥は、大坂冬の陣、夏の陣の軍功で、直孝より屋敷を賜った彦根藩士である。ところが、大村の出世を嫉む藩士が直孝に讒言(ざんげん)し、その言葉を信じた直孝は、大村に閉門を命じた。大村は悲憤のあまり屋敷に火をかけ妻と共に自刃した。その後、讒言が偽りであったことを知った直孝は大村を赦免し、夫妻の菩提を弔うために大村新弥屋敷跡に江國寺の建立を命じたのである。大村夫妻の憤死後、月夜に屋敷跡を通ると大入道の影が前方を歩いたり、雨の夜には傘の上に誰かがのしかかって押さえつけたりする話が城下に流布したという。『江國寺創建由緒』には「其後以来当屋敷跡より夜々妖怪現れ通行人を悩ませり」とある。

連藤久見子さんが描いた22の妖怪を展示。連藤さんは、自然と不自然のすきまに潜む、ちょっと不思議なものやことに興味があり、さまざまな手仕事や読書、スケッチをしながら日々を飽きることなく過ごしている滋賀県在住のイラストレーター。



●「人蝶」(彦根市立図書館蔵・9月23日まで実物展示・9月23日以降複製)

彦根城下四十九町(現城町1・2丁目、馬場1丁目)の町人で、町人代官の下で蔵手代を勤めていた田中藤助の日記に描かれた不思議な生きもの。「越中国(現富山県)放生洲(津)に出たとされた「生物」。長さ三丈五尺四寸(約10.6メートル)、腹の色は火のごとくで、名を「人蝶」と付けられたとの由を記す。日記宝暦9年(1759)7月21日条(新修彦根市史第2巻より)

●彦根藩第12代井伊直亮がコレクションしていた「河太郎図」 (原本 彦根城博物館蔵・複製展示)

実物は縦94センチ・横40センチと大きい。手足には4本の指、黒く尖った爪、鱗、指の間には水掻、おかつぱ頭で黒髪が墨一色で描かれている。直亮が収集し自らの蔵書印「張琴館図書印」を捺した「河太郎図」である。よく似た図像に、川崎市市民ミュージアム所蔵の「寛永年中豊後肥田ニテ捕候水虎之図」があり、そこには鱗はなく頭には円形の皿が描かれ、「頭ノ皿二蓋アリテ 蛤ナトノ如ク打カブリ 深サ一寸許カリ」と注釈がついている。

河童の皿は、どのように頭についているのか、いかにして水を溜めておくのかなど疑問を解くことができる。



●多賀参詣曼荼羅(原本 多賀大社蔵・複製)

稲依別王命(いなよりわけおうのみこと)と愛犬の小白丸の伝説が「多賀参詣曼荼羅(安土桃山時代)」に描かれている。多賀町富之尾の「犬上明神」と犬上郡豊郷町八目の「犬上神社(犬頭明神)」は、おそらく同じ伝説を語り継いでいる。小白丸は首だけになっても、大蛇の喉に食らいつき命を守った名犬である(写真は部分)。

LAKE GLASS MUSEUM 2

MLGs × ピワイチ × 米原駅サイクルステーション × まちなか博物館
with Rethink PROJECT



LAKE GLASS(レイクグラス)は、長い時間をかけて琵琶湖の波に洗われ摩耗し、湖岸に打ち上げられた空き瓶などのかけらである。日本の海岸では、シーグラスと呼ばれている。角がとれ、磨りガラス状になったガラスのかけらを日にかざした記憶をもつ人は多い。

レイクグラスは日本一の大きさを誇り、大きな波が生じる琵琶湖だから手にすることができる宝物である。うち捨てられ忘れ去られたLAKE GLASSは、人の都合で(良きにつけ悪きにつけ)異形な姿で甦る妖怪に似ている。

琵琶湖で拾ったレイクグラスをお持ちください。このミュージアムで展示させていただきます(但し一個に限る。拾った日付と場所、イニシャルをお知らせください)。